

## 認知症高齢者ケアのあり方に関する考察

### —小規模多機能型居宅介護事業所の取組から—

○ 立教大学大学院 氏名 張 允禎 (007926)

キーワード：認知症高齢者、いきる姿の支援、小規模多機能型居宅介護

#### 1. 研究目的

厚生省が2003年に公表した『2015年の高齢者介護』では「尊厳を支えるためのケアモデル」として、いわゆる「認知症ケア」の「特殊」から「一般」への転換が図る必要があると指摘している。また、「団塊世代」が老年期に達する2015年までに「小規模多機能サービス拠点」を整備し、在宅サービス、逆ショートステイ等を通じた施設介護機能の地域展開を行うことが提唱され、「通って、泊まって、来てくれて」という、住み慣れた地域でできる限り今までの生活が維持できるようなサービスが提示された。そうした指摘を受け2006年介護保険法の改正により地域密着型サービスの一環として小規模多機能型居宅介護（以下：小規模）が創設された。厚生省の社会保障審議会の「社会保障・税一体改革」の議論においても、2025年までに40万人分の小規模を整備することが示されており、今後も小規模の普及・促進を図る必要があるとされている。（社会保障審議会 2011）

このような流れの背景には、従来の大規模集団ケアから小規模に分けてその人の個別性を尊重しようとする反省がある。

認知症の高齢者を取り巻く問題は、本人自身が進行する認知症の中で混乱をきたし、周囲と上手くやっていけなくなったり、自分一人では生活を維持できなくなることが問題の発端であると言える。それは、認知症高齢者の状態は環境の変化に大きな影響を受けやすい特徴があるからである。その故に認知症高齢者の「いきる姿」の支援は認知症高齢者本人の今までの暮らしの維持であると言えよう。

本研究は認知症高齢者を地域で共に暮らす生活者としてとらえ、その認知症高齢者の当事者性を「いきる姿」という言葉を用いて検討する。また彼らの「いきる姿」の支援を、小規模の実践に注目して考察する。その上で小規模における「いきる姿」の支援はどういったものであるのかを考察し、今後の認知症ケアの可能性を模索する。

#### 2. 研究の視点および方法

本研究は認知症高齢者を地域で共に暮らす生活者の一員として照らし出し、地域を基盤とし展開されている小規模事業所の実践を射程にいれ、認知症ケアのあり方を考察する。また、認知症高齢者のその人らしさ、言い換えれば認知症高齢者の当事者性を認知症高齢者の「いきる姿」という言葉を用いて研究を進める。

調査対象の事業所は、先進事業所と言われている小規模5か所とし、各2日間の参与観察を行うとともに、事業所の管理者もしくは代表にインタビュー（1時間30分~2時間）を行った。

事業所には研究協力依頼書を作成し、研究の趣旨を説明した上で研究協力への承諾を得た後、録音した。インタビューは半構造化面接で、逐語録に起こした後、意味・類以性に従いラベリングし、分類を行った。

なお、事業所の選定は、テレビ・新聞・雑誌・論文から採り上げられている。もしくは福祉及び介護に関連する賞を受賞したことがある事業所をピックアップし選定を行った。

### 3. 倫理的配慮

いずれの調査においても、倫理的配慮として対象者に対して研究のテーマ、目的、内容の説明に加え、個人情報保護されること、研究への協力は自由意思であること等を含む研究協力依頼書及び承諾書を取り交わし、承諾を得てICレコーダーの録音を行った。

また、分析においてインタビュー対象が特定できないように匿名化した。これらは日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に基づき配慮した。

### 4. 研究結果

本研究の調査の主な結果は以下の通りである。

小規模ケアの始まりは本人と関ることであった。小規模ケアでよく言われる「馴染みの関係作り」と関連している。突然「世話になる」のではなく、徐々に馴染みの関係を作り上げ「一緒に過ごせる」という、お互いの信頼関係を作り出すことであった。そのために、本人の生活全体の流れと過ごし方を把握し、できることとできないことを見極め、できるだけ今までの在宅生活が維持できるように心がけていた。それは認知症高齢者を介護する家族に対しても同様で、家族ができることとできないことを見極め、家族の不安感や介護負担が軽減できるように、家族に対するケアも同時に行われていた。

また、そうした本人とのかかわりや家族とのかかわりを常にスタッフ同士が共有できるようなチームワークが強調されていた。とりわけ、スタッフには豊かな介護経験や資格といった高い介護スキルより、認知症ケアに対する根本的な理解、状況の変化に適切に対応できるしなやかさ、「一緒に過ごす、もしくは共にする」という姿勢が求められていた。

今回の調査で明らかになった小規模ケアの最も特徴的なことは、そのケアが断片的とか一時的なケアではなく、できるだけ今までの暮らしそのものが維持できるような継続的なケアということであった。すなわち、様々な社会資源と認知症高齢者が馴染みのある地域に注目をし、それらと本人とを繋げていくことであった。

### 5. 考察

環境の変化を受けやすい認知症高齢者の特徴を考える際にはもっとも基本的な考え方であるにもかかわらず、今まで認知症高齢者はケアを受けることによって、今までの暮らし、馴染みの関係から切り離されることがほとんどであった。

研究結果で述べたように、小規模で行われているケアは、徹底的な本人中心のケアである。小規模の特徴の一つは本人の馴染みのある地域をケアの基盤として行われることである。このような小規模ケアの取組は、認知症を抱えている本人のみの関わりではなく、支える家族への理解と協力、地域住民・行政・医療などの多面的な社会資源に働きかけ、相互に行き来するケアであった。これは認知症ケアに留まらずコミュニティ再生に直接繋がる役割も果たしているともいえる。その故に小規模ケアにおける認知症高齢者ケアこそ「いきる姿」の支援に最も近いケアであると言えよう。

とりわけ、認知症高齢者の「いきる姿」の支援は、自分を失っていく認知症高齢者に対する『支援』ではなく、今までの生活を多面的に横に繋げていく『支縁』であることが明らかになった。

今回の調査は先進地と言われているいくつかの特定の事業所のみ調査であることを踏まえ、今後もっと広い範囲で調査を深める必要がある。また、本人たちの「いきる姿」、そのものの考察も同時に探っていきたい。